

## 特集

## あめを活かすまちづくり

# 雨水マスタープランを策定

岡▼土木課  
(☎71)2239)

### 雨水を活かすための計画

上の写真は、豪雨時の緑町のようす。道路が冠水し、住宅に被害が及びそうな状態であるのが分かります。

平成12年東海豪雨や平成20年8月末豪雨に代表される、集中豪雨やゲリラ豪雨。これらは全国で頻発しており、安城市でも浸水などの被害が発生しました。こうした浸水被害から暮らしを守るべく、「雨水マスタープラン」を策定。この計画で、より災害に強く、水環境にやさしいまちを目指すための取り組み方針を示します。

●計画期間 平成23年度～32年度

●基本方針 「あめの恵みを活かす安城」が基本理念です。「水資源」と「防災」の視点を取り入れた、新しい「雨水対策」を、行政や市民、事業者で、協働して推進していきます



平常時



豪雨時の二本木小学校付近

### 計画の概要

雨水マスタープランでは、「流す」「浸透させる」「貯める」「使う」「学び備える」の5つのカテゴリに分類し、施策を検討しました。その中から、3つの主要な施策を紹介します。

■その1 市民、事業者とともに雨水を貯めたり、浸透させたりします

豪雨などによる水害を防ぐには、水田や畑が持っている保水機能が有効。これらが、河川への流出量を抑え、氾らんを起しにくくしてくれます。

しかし、近年は都市化により、毎年約30ヘクタールの農地が喪失しています。河川への雨水流出量は、増大する一方です。そこで必要になってくるのが、雨水の流出量を増やさない工夫。市民や事業者、行政が協働して流出量を抑える施設の設置を推し進める考えです。改築のときや、新たに住宅や工場を建てる時に、雨水を貯めたり、浸透させたりする工夫をし、雨水流出量を増大させないことを目指します。

## 市民の皆さんができること

### 貯留槽の設置

タンクを設置したり、下水道への接続で不要となった浄化槽を活用したりして、雨水を貯めることができます。これにより排水路に流れる雨水を抑制できます。

### 雨水利用の促進

貯めた雨水は、庭の水まきや洗濯用水として利用できます。また、地震などによる断水時の備蓄水としても活用できます。



貯める

使う



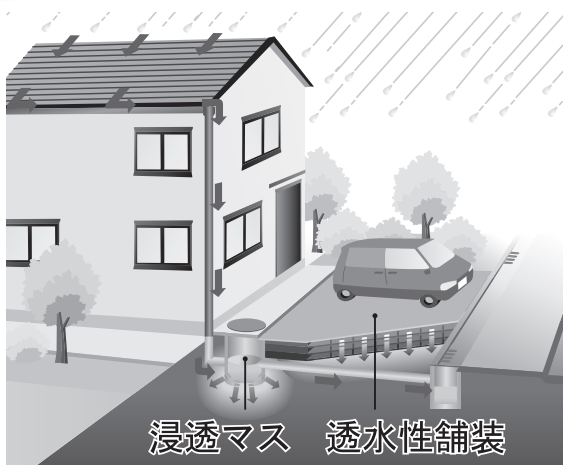
### 浸透施設の設置

家を建てる際には、浸透マスの設置や透水性舗装の整備に取り組みましょう。これにより、雨水は地下にしみ込み、ゆっくり河川へ流出します。



浸透マス

浸透させる



浸透マス 透水性舗装

# 雨水マスタープランを策定

## いいですよ、貯留タンク

### ●中嶋さん(小川町)

すでに設置していた姉のすすめで、昨年の9月に貯留タンクを設置しました。市から補助金が出るのと、水道代の節約になると思ったのが理由です。

貯めた水の利用は、主に庭の花などへの水やり。タンクの雨水を使えば、その分の水道料金を浮かせることができます。

設置してすぐは、水が貯まるのが楽しくて、雨の日が待ち遠しかったですね。雨の多い6月をまだ経験していないので、今から楽しみです。



中嶋さん宅の貯水タンク

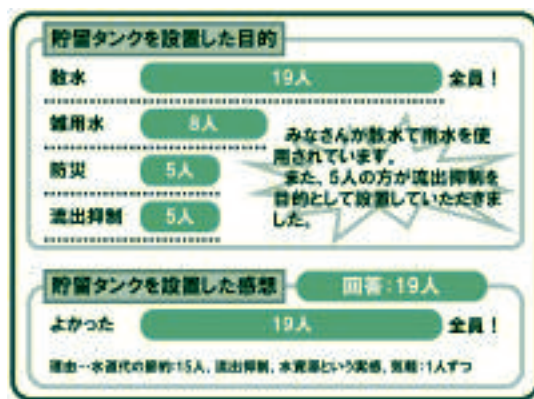
**貯留・浸透施設の設置を**

■雨水貯留浸透施設設置補助  
貯留タンクなど、雨水を貯めたり浸透させたりする施設を設置する際、補助金制度があります。

●補助金額 工事費の2分の1。ただし、限度額は設置する施設によって異なります  
参考例↓市販の20リットル以上の貯留タンクを設置する場合、工事費の平均は、約5万2000円。このとき補助額は、上限の2万5000円となります。  
※補助対象外のものもあります。

**設置前に相談してください。**

●貯留タンクのアンケート結果  
市では、補助制度を活用した人に、アンケートを実施。19人から回答をいただきました。  
貯留タンクを設置した目的として、すべての人が散水をあげており、さらに、約3割の人が流出抑制も目的としていることがわかりました。  
感想を聞いたところ、全員が「設置してよかった」と回答。「水道代の節約」「流出抑制」「水資源」などの効果を実感できているそうです。



**総合治水をぐ存じますか**

■総合治水週間  
水害から生活を守ることを治水といいます。安全なまちづくりには、行政や市民などが一体となり、総合的に取り組むことが大切です。この機会に考えてみましょう。

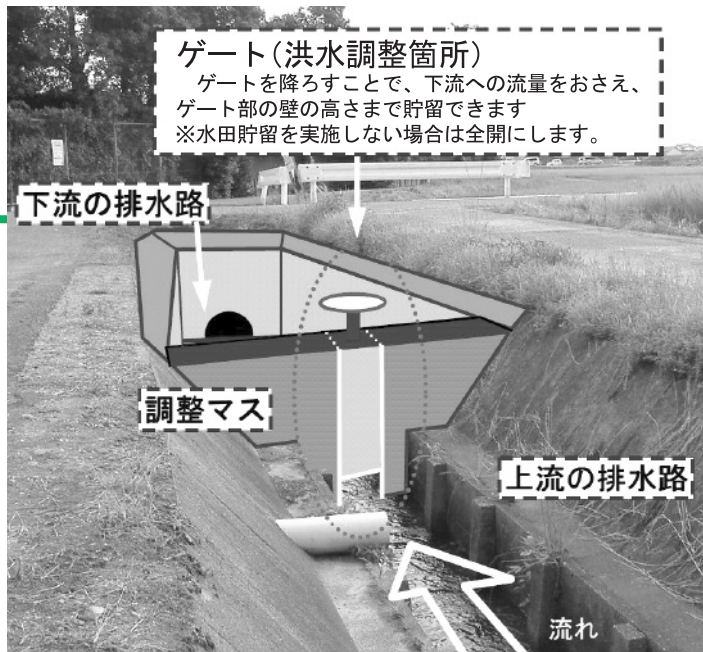
●とき 5月15日(月)～21日(日)

■パネル展示  
総合治水を知ることができ、写真や資料を展示します。

●とき 8月20日(土)～25日(木)  
午前9時～午後5時(22日(月)を除く)

●ところ 北部公民館

問▶土木課(☎71)2239)



■その2 田んぼに、もう少し雨水を貯めます

田んぼは、もともと雨水を貯留する機能を持っています。本市も、約4割が田んぼです。この田んぼに貯める量を、通常より5cm程度多くすると、その貯留能力は市全体で100万㎡に。水害を防ぐには、とても大きな効果を得ることができます。

田んぼは、本市の特徴的な防災資源。水田からの排水路に調整マスを設置すれば、放流量が制限でき、河川の氾らんを防ぐことができます。



■その3 水害について学び、自らを守るための準備をします

ほとんどの人は、水害に関心はあるものの、自分のこととして考える機会は少ないでしょう。そのため、水害について考え、適切に判断できる能力を育む機会が必要になります。

そこで、市民が主体的に考え、議論できる話し合い(市民参加型ワークショップ)を開催し、「住民手作りハザードマップ」の作成を支援します。地域で、水害の危険箇所や水害対策、避難方法などを話し合うことで、その地域にとって有効な対策を実現できます。

●藤野町内会の例  
地域の皆さんが実際にまちを歩き、水害の視点から、「水害手づくりハザードマップ」を作成しました(下図参照)。

